

私の工夫

通常の学級における特別支援教育の
観点を取り入れた授業づくり
『令和の日本型学校教育』の実現をめざして

高梁市立津川小学校

指導教諭 五百藏 朋江



1 はじめに

令和3年1月の中央教育審議会
答申では、「令和の日本型学校教
育」の姿を「全ての子供たちの可
能性を引き出す、個別最適な学
びと、協働的な学び」としている。

私は、「個別最適な学び」とは、
児童の特性、学習進度、興味や関
心に応じて指導や支援をすること
で、児童が自らの学習状況を把握
して自分に合った学びを行うこと
と考える。また、「特別支援教育
の観点を取り入れた授業づくり」
とは、困り感のある児童へ適切な
指導や支援をすることで、どの児
童も「分かる」「できる」授業を
行うことと考える。個別最適な学
びを実現する上で、通常の学級に

において特別支援教育の観点を取り
入れた授業を行うことは、有効な
手立てとなるのではないだろうか。

2 実践の内容

(1) 実態把握と指導や支援の計 画

- ・アセスメントシートや観察など
による個人や学級集団の実態把
握を行う。
- ・授業で予想される困難さを想定
し、指導や支援方法を考える。

(2) 授業づくり

- ア 教材研究
ねらいの焦点化（身に付けさせ
たい力は何か・どのような児童の
姿が見られればよいのか）

イ 学習活動を組み立てる（単元
構成・本時案）
※（図1）のチェックシートの項
目を意識して授業づくりを行っ
ている。

- ①興味・関心・意欲を引き出す導
入（生活や経験との関連等）↓
 - ②見通しを持たせる手立て ↓ ③
自力解決の時間の設定 ↓ ④考え
を交流する場の設定 ↓ ⑤支援
が必要な児童への具体的な手立て
↓ ⑥学習活動の精選
 - ウ 板書や発問の計画、教材・教
具の準備（ICT機器・ワーク
シート・提示物等）
- 使つて等分したり、まとめて数え
たりする活動や、図や式をかい
て確かめる活動を通して、乗法や除
法の素地を培うとともに、よさや

(3) 実際の授業

第1学年 算数「おなじかずつ」

【単元の目標】同じ数ずつに分け

る場面について、数図ブロックを

使つて等分したり、まとめて数え

たりする活動や、図や式をかい

て確かめる活動を通して、乗法や除

法の素地を培うとともに、よさや

特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり チェックリスト

2022 五百藏

特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり	○学級づくり	安心して過ごせる 活耀の場がある 違いやよさを認め合える 分からないと言え
	○環境づくり	刺激が少ない（黒板周辺がすっきりしている） 整理整頓とんされている 1日の流れが分かる 生活や学習のルールが明確である
	○授業づくり	「分かる」「できる」授業を（下表参照）

○ 特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり チェックリスト（授業づくり編）

	意識すること・ポイント	チェック
何を学ぶのか（身に付けさせたいか）を焦点化しているか。	（ ）の力を付ける。 めあて・まとめを何にするか。 評価規準がはっきりしているか。	
支援が必要な児童が、どのような姿であれば、達成できていると言えるか。	何が分かり（ ） 何ができて（ ） 何に気付けばよいのか（ ）	
導入	興味・関心・意欲を引き出せるか。 生活や経験との関連があるか。 学習の流れが分かり、見通しがもてるか。 （教師の手本・見本、学習活動の流れの表示）	
展開	自分で考える時間を確保しているか。 （一人で考えられる課題であるか。） 児童が困ったときの手立てがあるか。 （ヒントカード、ワークシート、スモールステップ） できる児童への手立てがあるか。 考えの交流の時間を確保しているか。 （ペア、グループ、全体） 発表の時間を確保しているか。 （やってみせまねをさせる。ペアで発表させる。） 体験的・操作的な活動があるか。	
終末	1時間の学習でできるようになったこと、 がんばったことなど 伝わる評価を…。 生活の中で生かしていけるか。	
板書	構造化、色分け、板書量 書くことが苦手な児童への配慮	
発問・指示	精選された発問を考えているか。 指示は簡潔で明確であるか。	
ICT	効果的に活用できているか。	

（図1）特別支援教育の観点を取り入れた授業づくり
チェックシート

楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。

①興味・関心・意欲を引き出す導入（生活や経験との関連等）

生活科で育てたアサガオの種や給食の白玉を分けた写真（図2）を見せることで、「同じ数ずつ分ける」ことに着目し、本時の12個のクッキーを3人で分ける場面をイメージすることができた。



（図2）日常の経験から

②見通しを持たせる手立て

既習事項カードから本時の学習に使えるような方法を選ぶことや

（図3）、教師がブロックの操作を演示することで、最適な方法を児童が選択し、解決方法の見通しを持つことができた。



（図3）既習事項カード

③自力解決の時間の設定

「教師と同じように操作する↓自分でやってみる↓ペアで見せ合う」という流れや「ブロックを12個用意しましょう」「3人に分けてみましょう」という指示など、スモールステップで学習を進めていくことで、どの児童も自分で数図ブロックの操作をしながら考えることができた。

④考えを交流する場の設定

じつとしておくことが苦手な児童や考えに自信のない児童のために、ペア（グループ）・全体での

話し合いを取り入れ、活動に変化をつけたり、多様な考えを知ることでできる時間を確保したりした。また、全体での発表の形式を個人に限定せず、ペア（グループ）の一人が説明し、一人が図を指し示したり操作をしたりすることで、全員が発表に参加できた。（図4）



（図4）ペア発表の様子

⑤支援が必要な児童への具体的な手立て（書くことへの配慮）

板書と並行して、教材提示装置でノートと同じ枠を映し教師が書きこむことで、同じようにノートへ書き写すことができるようにした。それでも難しい児童には、教師が書き込んだ紙を渡し手元で書

き写すことができるようにした。そうすることで、全員の進捗を揃えることができた。

3 おわりに

通常の学級においても、特別支援教育の観点を取り入れた授業づくりを実践することで、児童の学びが「個別最適な学び」へとつながっていくことを実感した。算数に苦手意識をもつ児童が、「算数が前より好きになった」と、笑顔で話す姿が印象に残っている。今後も、どの児童も「分かる」「できる」授業を大切にしながら、個に合った適切な指導や支援を行うことで、児童一人一人の力を伸ばし、可能性を広げたい。また、子どもたちの10年後、20年後を思い描き、新しい未来に対応できる子どもたちを育てていくとともに、自分自身も学び続け、変化に対応できる教師でありたいと思つている。